

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2022

課題番号：16KK0025

研究課題名（和文）ミクロネシア英語の普遍性と個性 変種間の比較研究と20年後の実時間調査（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Universality and locality in Micronesian Englishes: Comparative analyses across Micronesian Englishes and real-time studies of Palauan English over 20 years (Fostering Joint International Research)

研究代表者

松本 和子 (Matsumoto, Kazuko)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：80350239

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,600,000円

渡航期間： 2ヶ月

研究成果の概要（和文）：本国際共同研究および基課題は2つの目的を持つ。一つ目はトレンド、コホート、パネルという3つの異なる種類の実時間研究を実施し、従来の見かけ上の時間研究の妥当性を検証することである。二つ目は世界英語やコロニアル英語の分野でこれまで空白地帯と見なされてきたミクロネシア地域で誕生しつつある多種多様な英語変種の形成の歴史と言語的特徴を記述するなどの基礎研究を固めることである。本研究は危機言語の消滅過程や新変種の形成過程の研究に3種類の実時間の手法を採用するという極めて前例の少ない斬新な事例を提供し、また日本と縁のある隣国ミクロネシア地域の英語変種に関する初の概説を導いたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまで実時間調査が行われてこなかった言語消滅や新変種形成の研究に実時間の手法を用いた斬新なもので、社会言語学の調査方法論および理論面の前進に寄与するものである。また世界英語やコロニアル英語の分野では、これまで空白地帯とされ、その存在すら知られてこなかったミクロネシア英語に着目し、萌芽期より調査・研究・公表し続けたことにより、国際的な百科事典に新たに「ミクロネシア英語」という項目が加えられるに至ったことは、当該島嶼国への大きな貢献になり得るだろう。大洋州は日本の隣国で歴史的にも深い関係にあるため、日本人研究者が当該地域に関する研究を推進することは国際的評価の向上に資するものだと考える。

研究成果の概要（英文）：This research project explores the formation of Palauan English and the obsolescence of Palauan Japanese over time by reinvestigating the same speech communities two decades after my initial research. In recent years, variationist sociolinguists have increasingly conducted real-time studies of language change in monolingual communities. Given the rarity of this approach in the study of both language obsolescence and the formation of new varieties, this research project was methodologically motivated to fill a gap by reassessing the dying colonial Japanese variety and a newly emerging English variety in Palau. Another aim of the project is to strengthen foundational research on Micronesian Englishes by describing the history of their emergence and their linguistic characteristics that reflect diverse substrate languages across the region.

研究分野：社会言語学

キーワード：Micronesia English ミクロネシア英語 Palauan English パラオ英語 panel study パネル調査 cohort study コホート調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

パラオ共和国はスペイン、ドイツ、日本、米国による一世紀におよぶ統治を経て独立を果たし、パラオ語はもとより、日本語、英語などの複数の言語が複雑に入り混じった国家であるため、多言語社会における接触言語の形成・変容・衰退などを調査する上で最適な地域の一つであると考えられる。そのため研究代表者は1997年より継続的にパラオで言語調査を行い、多様な角度から多言語社会における言語変化のメカニズムの解明に努めてきた。

図1に示すように、これまでの研究の経緯としては、1997年からマクロな視点よりパラオの多言語状況の概要（言語接触・言語政策・言語使用の歴史、現在の言語意識や言語能力）の把握を目指すとともに、ミクロな視点よりパラオ日本語の形成と消滅のプロセスおよびその要因を探求するため、それぞれ質問票と日本語談話の収集を行った。少し遅れて2000年からパラオで形成しつつある英語変種に関するミクロな言語学的分析にも着手した。

その10年後に当たる2007年にはコホート（cohort）調査として日本統治を経験した世代から、およびパネル（panel）調査として同一話者から日本語談話を収集し、2010年にはトレンド（trend）調査として各年代より英語談話を収集した。3つの異なるタイプの「実時間（real-time）」を用いた分析を行い、それらの成果を学会や招待講演で公表、学術雑誌や編著書で刊行してきた。

図1：多言語社会パラオに関する社会言語学的研究の概要

	多言語状況の把握 (言語使用・意識・能力)	パラオ日本語の 形成と消滅	パラオ英語の 形成と変容
データⅠ	1997-8年 各年代より質問票収集	1997-8年 日本統治を経験した世代 より日本語談話収集	2000年 各年代より英語談話収集
データⅡ		2007-8年 日本統治を経験した世代 より日本語談話収集	2010年 各年代より英語談話収集
データⅢ	2017-8年 各年代より質問票収集  【基課題】 トレンド調査	2017-8年 日本統治を経験した世代 より日本語談話収集  【基課題・国際共同研究】 コホート調査・パネル調査	2020年 各年代より英語談話収集  【国際共同研究】 トレンド調査

基課題「多言語社会パラオにおける実時間調査 20年後の経年調査」(基盤B: 課題番号 16H03412)は上記の研究を継続・発展させたものである。研究代表者が初めてパラオで各データを収集した1997年よりちょうど20年目となる2017年に再度同様のデータを収集し、この20年の間にパラオの多言語の使用や能力、意識がどのように変化したか、さらにパラオの高年齢層の話す日本語変種がどのように変容したかを明らかにすることを目指した。つまり、基課題はあくまで「20年後の経年調査」を行うことに主眼が置かれているため、20年前に収集されたデータと同様の質問票、パラオ日本語の談話を収集し、通時的に分析することが柱となっており、若干遅れて2000年に開始したパラオ英語に関する研究は付加的な位置づけであった。そこで、国際共同研究として2020年に各年代の話者より英語談話を収集することで、パラオ英語の研究を進展させ、パラオ日本語の研究と足並みを揃えたいと考えた。

社会言語学分野における言語変化の研究は、これまで「見かけ上の時間（apparent-time）」を用いた分析手法が主流を成してきた。これはある地域で一時点において、異なる年齢層の話者からデータを収集し、そこで観察される年齢差を変化の指標と見なす手法である。一時点においてデータの収集と分析を行えるという利便性があるだけでなく、現在進行中の変化を捉え、その諸要因を考察できるという分析上のメリットもある。しかし、この手法は若年層が臨界期以前に習得した言語使用を中高年層になっても保持するとの「仮説」を基に、若年層の言語使用を言語変化の向かう方向として捉えるものであり、この仮説の信頼性をめぐる議論が浮上している。

近年、この仮説に頼らず、時間の経過とともにある言語が変容していく過程を追跡調査する研究が増加している。これは実時間と呼ばれる分析手法で、ある地域で反復的な調査を行い、連続的に言語の変容を追跡調査する方法である。見かけ上の時間を用いた分析に比べ、実際の変化の方向性と進度を観察できることが利点として強調されている。だが、実時間を用いた分析はサンプリング方法、話者の属性の分布、データの種類、収集法などが統一されて初めて意義のあるものとなる。再調査において前回と同じものを再現することが非常に困難であること、またデータ収集の完成までに10年、20年と長い年月を要することなどから、実時間を用いた分析はこれまで希少なものとされてきた。

しかし社会言語学が1960年代に誕生してから半世紀が過ぎる今、調査者自身がかつての調査地へ足を運び、数十年後に再調査を行うことで、前回の見かけ上の時間を用いた分析によって得られた研究結果の妥当性を検証しようとする動きがある。しかしながら、これまでこうした検証は単一言語社会における方言の変容に関する研究に限定され、危機言語の消滅に関する研究やコロニアル英語の形成や変容に関する研究で採用された報告は見当たらない。したがってパラオ日本語の形成と消滅およびパラオ英語の形成と変容に関する実時間研究を行うことは、社会言語学の調査方法論における議論に寄与し得るものだと考える。

一方、「世界英語 (World Englishes)」や「コロニアル英語 (Colonial English)」の分野では、これまで調査されてこなかったミクロネシア地域の英語変種の研究が世界的な注目を集めている。スイスおよびドイツ政府の多大な支援を得て、この数年の間にミクロネシア地域における英語変種に関する巨大な研究プロジェクトが複数発足し、欧州の研究者らが現地調査・分析を急ピッチで進め、いち早く国際的な学術雑誌で成果を公表しようと競い合っている。そのため、パラオ英語の研究も早急に進める必要に迫られていた。本プロジェクトの海外共同研究者であるDavid Britainは「English in paradise? Emergent varieties in Micronesia」(Swiss National Science Foundation: 課題番号156849)という巨大プロジェクトを立ち上げ、ミクロネシアの5地点(コスラエ、キリバス、サイパン、グアム、ナウル)における英語変種の調査を2015年から2019年まで実施することになっていた。

## 2. 研究の目的

本国際共同研究は大きく分けて2つの目的を持つ。一つ目はトレンド、コホート、パネルという3つの異なる種類の実時間研究を実施し、従来の見かけ上の時間研究の妥当性を検証することである。二つ目は世界英語やコロニアル英語の分野でこれまで空白地帯と見なされてきたミクロネシア地域で形成されつつある多種多様な英語変種の形成の歴史と言語的特徴を記述するなどの基礎研究を固めることである。以下、二つ目の目的から詳細を説明する。

本研究では、(1) 研究代表者(松本)が収集したパラオ英語とスイスの海外共同研究者(David Britain)が率いる巨大プロジェクトで収集した5地点のミクロネシア諸島の英語変種との比較研究を行うことで、同地域内における複数の英語変種の形成過程とその帰結に潜む普遍性を検出することを最終目的とし、まずはそのための土台を整備することを目指した。

次に一つ目の目的、つまり実時間研究を行うためのデータ収集・整備および見かけ上の時間仮説の検証に関しては、パラオ英語とパラオ日本語の両方において実施を目指した。まず(2) 研究代表者が2000年に初めてパラオ英語の談話データを収集してからちょうど20年目に当たる2020年に経年調査を行い、各年代の話者より英語の談話データを収集し(データIII)、10年前および20年前にも収集していた同様のデータ(データI・データII)と組み合わせたトレンド調査分析を展開し、パラオ英語の形成の過程や変化の方向性・要因などを解明することを目指した。

言語変化の普遍的なメカニズムの解明を目指す言語変異理論の研究においては、個別の言語変種の実証的なデータだけでは不十分であるにもかかわらず、調査者間に方法論的差異が生じることから本格的な変種間の比較研究は稀である。本研究では、10年、20年前に研究代表者が同一の手法で集めたデータを活用することにより、こうした差異を最小限に留めつつ言語変容を通時的に観察することができ、さらに海外共同研究者が率いるスイスの巨大プロジェクトと連携することでパラオ英語とその他複数のミクロネシアの島々の英語変種間の比較考察が可能となるため、同地域における言語変化の普遍性に迫ることができる。こうした研究は、当該分野では極めて前例の少ない斬新なものであり、理論の発展・前進に寄与するものになると考える。

また、基課題「多言語社会パラオにおける実時間調査 20年後の経年調査」の一部を成すパラオ日本語の研究においては、(3) 言語消滅の分野で重要視される「最後の話者(last speaker)」の記録を継続することを目指す。消滅に瀕した言語の調査では、定量分析を行えるほどの被験者数を集めることが困難である場合が多いため、少数の話者の記述・定性分析に止まり、結果として正確さを欠く結論を導くことが問題視され初めている。研究代表者はこれまで25年間にわたって継続的に最後の話者たちの日本語を記録してきたため、言語消滅の過程を経年的にかつ定量的に分析できる点においても、言語消滅の研究に貴重な事例を提供することができる。

## 3. 研究の方法

上記の(1)~(3)の研究目的に分けて、以下研究計画を記していく。なお、新型コロナウイルス感染症拡大という地球規模のパンデミックに見舞われ、全世界において海外渡航が停止する状態が数年にわたって続いたことから、研究開始当初の計画と実際の進め方に変更を余儀なくされた

面は否めない。その反面、極めて重要であるものの、これまで未整理・未分析となっていた膨大な一次データの電子化や活字化を図ることができ、現在の研究の土台を補足・強化することができた意義は大きいと考える。その結果、分析・執筆を加速させ、一定の成果・達成度が得られた。

#### (1) ミクロネシア英語変種に関する基礎研究

本プロジェクトでは (a) 研究代表者がこれまで収集してきたパラオ英語と海外共同研究者が主導し 5 地点で収集したミクロネシアの英語変種をコーパスとして整備し、(b) ミクロネシア英語の形成の歴史と言語的特徴を記述し、(c) 変種間の比較研究を行うことでミクロネシア地域における英語変種の普遍性と特異性に迫る。そのためには研究代表者が海外共同研究者の所属するスイス連邦ベルン大学に長期滞在し、まず (a) を進め、次に研究代表者がディスコース・語用論的変異の分析を、海外共同研究者が音韻・音声的変異の分析を担当し、(b) および (c) を実施する予定であった。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大により 2020 年に予定されていた長期滞在は大きな変更を余儀なくされた。本プロジェクトの再再再延期の末の最終年度になり、外務省の感染症危機情報レベルが 4 (退避勧告) や 3 (渡航中止勧告) から 2 (不急不要の渡航は止めてください) へ変更となったことを受け、渡航して共同研究を進めるべく日程調整を試みたが、研究代表者の所属大学 (東京大学) の学事歴と海外共同研究者の都合が合わず、短期間の滞在に留めざるを得なかった。そのため本課題では主に (a) および (b) を進め、次なる比較研究 (c) に向けての土台を整備した。

#### (2) パラオ英語の形成と変容に関する実時間 (トレンド) 調査と分析

研究代表者が初めてパラオ英語の談話を各年代から収集してからちょうど 20 年目に当たる 2020 年に経年調査 (データ III の収集) を行い、2000 年および 2010 年に同様のサンプリングを基に収集していた談話データ (データ I・データ II) と合わせ、10 年間隔で収集された 3 つの時点の実時間を用いたトレンド分析を展開する予定であった。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大により 2020 年の経年調査は延期せざるを得なかった。漸く 2022 年に渡航が可能となったものの、研究代表者の所属大学 (東京大学) の学事歴により、当初の予定よりも短い調査期間に留めざるを得なかった。そのため本課題では、(a) 2000 年と 2010 年に収集してあった談話データ (データ I・データ II) のうち、未整理・未分析となっていたものと、2020 年に収集した新たな談話データ (データ III) の電子化や活字化を進め、トレンド研究に向けての足掛かりを作った。さらに (b) 2000 年に収集した (データ I) と 2010 年に収集した (データ II) を組み合わせたトレンド研究を中心にディスコース・語用論的変異に関する分析を進め、随時、学会や招聘講義で公表し助言を得て、国際ジャーナル等で刊行した。

#### (3) パラオ日本語の最後の話者の記録と実時間 (コホート・パネル) を用いた分析

パラオの日本語に関してはこれまで数年おきに反復的な調査を行い、時間の経過とともに日本語変種がどのように変容し消滅していくかを観察するためのデータ収集を続けた。しかし一段と話者の高齢化が進み、多数の健康な被験者から計画書どおりに談話データを収集することがもはや困難な状況にある。現状では難聴、認知症等の障害のため、録音をしたものの (途中で止めることは礼を欠くため、最後まで行うが) 実際の分析には使用できないデータも多い。また、パラオには高度な医療機関がないため、病気の高齢者が国外の病院に長期間入院する場合もある。本研究ではまさにこうした問題を避けるために、パラオ英語の研究とパラオ日本語の研究を併用する。これにより日本語話者に会えないときには多数存在するパラオ英語話者よりデータを収集することで、現地へ行ったものの空振りに終わるといった事態を回避する。パラオ英語のデータ収集の際に、一人でも多くの「最後の話者」となり得る高齢の日本語話者より新たな談話データを入手し、同一地域で日本統治を経験した同一世代を追跡調査するコホート調査および同一被験者を追跡調査するパネル調査という 2 種類の実時間の分析手法を用いた言語消滅の研究を展開する。

研究代表者のこれまでの研究では、世界的に有名な Dorian (1981) のスコットランド高地ゲール語の消滅の研究で用いられた分析方法を採り入れてきた。具体的には、fluent speaker (消滅の危機に瀕した言語が流暢な話者)、semi-speaker や rememberer (かつて流暢に話したが現在はその能力が低下した話者) といった異なる言語能力を持つ 3 つの話者グループを比較分析し、グループ間にみられる言語使用の違いを「消滅の指標」と見なし、言語消滅の過程を考察するものである。しかし、通常、fluent speaker は高齢者、semi-speaker は中・高齢者、rememberer は中年・若年に当てはまることから、こうした分析方法は「見かけ上の時間調査」の範疇に入れられる。しかし前述の通り、近年、見かけ上の時間を用いた分析の信頼性が議論されている。これまで見かけ上の時間を用いた「言語消滅」の研究結果を実時間を用いて、その妥当性を検

証したものは見当たらないため、本プロジェクトではそうした斬新な検証を行うことで社会言語学における調査方法論の議論に寄与することを目指す。

#### 4. 研究成果

##### (1) ミクロネシア英語変種に関する基礎研究

ミクロネシア英語の基礎研究に関する成果をまとめ『Micronesian Englishes』(Mouton de Gruyter)として一冊の編著者として公表するため、現在、執筆・編集を進めている。それに先立ち、国際的に著名な出版社として知られるWiley Blackwell(オクスフォード)より全6巻から成る世界英語に関する百科事典『The Wiley Blackwell Encyclopedia of World Englishes』が2023年に出版されることとなり、その中で「The history of English in Micronesia」「English in Micronesia」という二つの章を海外共同研究者と分担執筆した。ミクロネシア地域で英語が形成された歴史と各島特有の現地語から影響を受けた多種多様な英語変種の特徴をまとめた当該章は、ミクロネシア英語に関する初めての概論となる。さらに英語の歴史研究では必読書である『Cambridge History of the English Language』の改訂版『New Cambridge History of the English Language』においても「English in Micronesia」の章の執筆依頼があり、海外共同研究者と分担執筆を進めている。以上のことから、ミクロネシア英語に関する基礎研究としてその形成の歴史と特徴の概観を示し、今後のより精緻な比較研究を行う土台を築くことができたと考える。

##### (2) パラオ英語の形成と変容に関する実時間(トレンド)調査と分析

2000年に収集した(データI)と2010年に収集した(データII)を組み合わせたトレンド研究を進め、現地語であるパラオ語からの呼称「*ollei, cherrang, charrach*」のみならず、英語の談話標識「*man, bro, dude*」の使用が増加傾向にあることを指摘し、その要因を考察した。同様に「*man, bro*」を多用することで知られるポリネシア系マオリ人の話す英語変種との比較研究を行うためにカンタベリー大学(ニュージーランド)に滞在した。

こうした実時間を用いたパラオ英語の形成と変容に関する実証研究の成果を複数の国際学会で発表し、また国際会議「English in Contact」で基調講演(2019)、スイスやニュージーランドの大学(ベルン大学、カンタベリー大学)で招聘講義(2017、2022)を行った。こうした研究成果の一部は国際ジャーナル『Journal of Asian Pacific Communication』(John Benjamins)(2020)と当該分野では著名な学会である「Methods in Dialectology」の論文集(2020)に収められた。

##### (3) パラオ日本語の最後の話者の記録と実時間(コホート・パネル)を用いた分析

実時間を用いたパラオ日本語の消滅に関する実証研究の成果を複数の国際学会で発表し、またアメリカ、ドイツ、スイスの複数の大学(スタンフォード大学、ドゥイスブルク・エッセン大学、ベルン大学)に招かれ招聘講義(全て2023)を行った。Routledge(ロンドン)のパネル調査のシリーズ第3弾となる編著書『Connecting the Individual and the Community: Contributions from Sociolinguistic Panel Research』に「A panel study of language obsolescence: The fate of (g) in a Pacific Japanese colonial koiné.」として収録され、2023年に刊行予定である。

さらに、本国際共同研究加速基金の基盤となった基課題の集大成として国際ジャーナル『International Journal of the Sociology of Language』(Mouton de Gruyter)より特集号「Diaspora Japanese」を編集し、世界に散在するディアスポラ日本語に関する概論「Diaspora Japanese: Transnational mobility and language contact」、パラオの日本語に関する論考「The vernacularity of Palauan Japanese」、日系メキシコ人の継承語としての日本語に関する論考「The maintenance of Japanese as a heritage language in Mexico: Evidence from Japanese pre-war migrants and newcomers」を刊行(2022)した。

さらに、コロナル日本語の比較研究として、パラオ日本語と同時代に形成された樺太日本語に関する共同研究も開始し、入植者がもたらした日本語方言間の接触および現在の主要言語(ロシア語)や傍層言語(朝鮮語)との言語接触を考察した。パラオ日本語との比較を含んだ論考「見かけ上の時間を用いた樺太日本語の研究 コロナル・コイナーの形成と変容」を『方言の研究9』(ひつじ書房)の特集号「方言の計量的研究」(2023)に寄稿した。

以上のことから、基課題と本課題の両方に取り組むことで、日米両国との一世紀間の接触によってミクロネシア地域に生み出された言語の状況をより総合的に描き出すとともに、他のコロナル日本語やコロナル英語との比較研究に着手したことでコロナル言語の普遍性と個別性への考察を深めることができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 8件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち.	4. 巻 9
2. 論文標題 見かけ上の時間を用いた樺太日本語の研究 コロナル・コイナーの形成と変容 .	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 53-82.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain (eds).	4. 巻 273
2. 論文標題 Diaspora Japanese.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Special issue of International Journal of the Sociology of Language.	6. 最初と最後の頁 1-180.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2022-frontmatter273	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.	4. 巻 273
2. 論文標題 Diaspora Japanese: Transnational mobility and language contact.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of the Sociology of Language.	6. 最初と最後の頁 1-29.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2021-0009	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and Naomi Tokumasu.	4. 巻 273
2. 論文標題 The maintenance of Japanese as a heritage language in Mexico: Evidence from Japanese pre-war migrants and newcomers.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of the Sociology of Language.	6. 最初と最後の頁 81-101.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2021-0008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.	4. 巻 2022
2. 論文標題 The vernacularity of Palauan Japanese.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of the Sociology of Language.	6. 最初と最後の頁 103-144.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ijsl-2021-0010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松本和子・吉田さち・高田三枝子・奥村晶子.	4. 巻 -
2. 論文標題 樺太日本語方言の変容 朝鮮語・ロシア語との接触の視点から .	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語学会2021年度秋季大会予稿集.	6. 最初と最後の頁 7-12.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち.	4. 巻 -
2. 論文標題 見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本方言研究会第113回研究発表会発表原稿集.	6. 最初と最後の頁 33-40.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Britain, David, Kazuko Matsumoto and Praparat Promparakorn.	4. 巻 -
2. 論文標題 Rural koineisation: Three cases studies from Palau, Thailand and England.	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Proceedings of 1st International Conference on Koine, koines and the formation of Standard Modern Greek.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 巻 59
2. 論文標題 Nativisation in adolescent Palauan English: A discourse-pragmatic perspective.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of Methods XVI: Papers from the Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology, 2017 (Bamberg Studies in English Linguistics).	6. 最初と最後の頁 75-82.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 A restudy of postcolonial Palau after two decades: Changing views on multilingualism in the Pacific.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Asian Pacific Communication.	6. 最初と最後の頁 34-59.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/japc.00044.mat	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko	4. 巻 34
2. 論文標題 Encountering Micronesia through sociolinguistic fieldwork.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 People and Culture in Oceania	6. 最初と最後の頁 89-100.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32174/jsos.34.0_89	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計24件(うち招待講演 8件/うち国際学会 21件)

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2. 発表標題 Speaking "Palish"? Nativisation of a newly emerging postcolonial English variety in the Pacific.
3. 学会等名 12th International Conference on Oceanic Linguistics 12 (COOL 12). University of French Polynesia, Outumaoro, Punaauia, Tahiti. (国際学会)
4. 発表年 2022年



1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 A panel study of language obsolescence: The fate of (g) in a Pacific Japanese colonial koine.
3 . 学会等名 Guest lecture, Department of English, University of Bern, Switzerland. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2 . 発表標題 Dream goal. If I have the brain ollei, I want to be a lawyer: Nativisation of Palauan English amongst adolescents.
3 . 学会等名 Invited lecture at Research Seminar, New Zealand Institute of Language, Brain and Behaviour, University of Canterbury, Christchurch, New Zealand. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 A moribund Japanese colonial koine in the Pacific: A panel study of language obsolescence.
3 . 学会等名 Panel session on "Panel research: Methodological challenges, practices and ways forward", Methods in Dialectology XVII. Johannes Gutenberg University Mainz, Mainz, Germany. (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2 . 発表標題 A real-time study of language obsolescence: An endangered postcolonial Japanese in the Pacific.
3 . 学会等名 Sociolinguistics Symposium 24. Ghent University, Ghent, Belgium. (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2. 発表標題 A panel study of the obsolescence of a Pacific Japanese colonial koine.
3. 学会等名 Invited lecture at LinguisTisch Lecture Series, Sociolinguistics Lab, University of Duisburg-Essen, Germany. (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2. 発表標題 Transplanted Japanese in the colonial diasporas: Dialect and language contact and obsolescence.
3. 学会等名 East Asian Linguistics Workshop, Department of East Asian Languages and Cultures, Stanford University, California, USA. (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本和子・吉田さち・高田三枝子・奥村晶子.
2. 発表標題 樺太日本語方言の変容 朝鮮語・ロシア語との接触の視点から .
3. 学会等名 日本語学会2021年度秋季大会.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本和子・高田三枝子・奥村晶子・吉田さち.
2. 発表標題 見かけ上の時間を用いた樺太日本語方言の変異と変化.
3. 学会等名 日本方言研究会第113回研究発表会.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fajist, Valeriya, Kazuko Matsumoto and Sachi Yoshida.
2. 発表標題 Kimchi or Chimchi: Korean dialects in contact and Russianization of Korean loanwords in Sakhalin.
3. 学会等名 NWAV-Asia Pacific 6. National University of Singapore, Singapore. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本和子・吉田さち・奥村晶子.
2. 発表標題 言語変異におけるエスニシティの役割 首都圏と極東ロシアサハリンにおける4つのディアスポラ変種の事例研究 .
3. 学会等名 共同利用・共同研究課題「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」第1回研究会 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田さち・松本和子.
2. 発表標題 サハリンの朝鮮語話者コミュニティにおける方言・言語接触 音節核のヴァリエーションに関する事例研究 .
3. 学会等名 第二回日本地理言語学会・新潟県立大学. (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2. 発表標題 A discourse-pragmatic perspective on nativisation in adolescent Palauan English.
3. 学会等名 Keynote lecture at English in Contact. Kyushyu University, Fukuoka, Japan. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Substrate influence versus SLA: The case of -t/d deletion in Palauan English.
3 . 学会等名 International Workshop on the Challenges of Linguistic Diversity. Institut fuer Germanistik, University of Bern, Bern, Switzerland, 24-25 September 2019. ( 国際学会 )
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Evseenko, Valeriya and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Language contact in Sakhalin: Japanese and Korean loanwords in a Far East Russian variety.
3 . 学会等名 20th Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages. Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo. ( 国際学会 )
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Substrate 1, SLA nil: The case of -t/d deletion in Palauan English.
3 . 学会等名 Invited lecture at Centre for Multilingualism in Society across the Lifespan, University of Oslo, Oslo, Norway. 4 September 2019. ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2 . 発表標題 Changing views of bilingualism in the Pacific: A restudy of postcolonial multilingual Palau after two decades.
3 . 学会等名 Linguapax Asia. Tsukuba University, Tsukuba, Japan. ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2. 発表標題 Why not take your kids to your fieldwork? Pros and cons of conducting field research with kids.
3. 学会等名 Lunchtime roundtable “Narratives of Motherhood”, Sociolinguistics Symposium 22. University of Auckland, Auckland, New Zealand. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2. 発表標題 Japanese on the menu: Language contact and food-related borrowings in Palauan.
3. 学会等名 Sociolinguistics Symposium 22. University of Auckland, Auckland, New Zealand. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.
2. 発表標題 Ollei I'm picky cherrang with a girl I like cherrang: Nativisation of a newly emerging postcolonial English variety.
3. 学会等名 Sociolinguistics Symposium 22. University of Auckland, Auckland, New Zealand. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2. 発表標題 Social embedding of linguistic change in adolescent Palauan English.
3. 学会等名 Methods in Dialectology XVI. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan. (国際学会)
4. 発表年 2017年

1 . 発表者名 Britain, David, Kazuko Matsumoto and Praparat Promparakom.
2 . 発表標題 Dialect contact, new dialect formation and koineisation: Three rural case studies from England, Palau and Thailand.
3 . 学会等名 1st International Conference on Koine, Koinés and the Formation of Standard Modern Greek. Aristotle University of Thessaloniki, Thessaloniki, Greece. (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Matsumoto, Kazuko.
2 . 発表標題 Speaking “Palish”? Social embedding of linguistic change.
3 . 学会等名 Invited lecture at Studies of Paradise: Where Language Meets Culture in the Pacific. University of Bern, Bern, Switzerland. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.
2 . 発表標題 Remote islanders are savage, ‘cos they eat sashimi without soy sauce: Contact-induced borrowings in the domain of food in Palauan.
3 . 学会等名 Invited lecture at Studies of Paradise: Where Language Meets Culture in the Pacific. University of Bern, Bern, Switzerland. (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1 . 著者名 Britain, David, Kazuko Matsumoto, Dominique B. Hess, Tobias Leonhardt and Sara Lynch (eds.).	4 . 発行年 2024年
2 . 出版社 Mouton de Gruyter.	5 . 総ページ数 300
3 . 書名 Micronesian Englishes.	

1. 著者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Wiley Blackwell.	5. 総ページ数 3120
3. 書名 English in Micronesia. In K. Bolton (ed.) The Wiley Blackwell Encyclopedia of World Englishes.	

1. 著者名 Britain, David and Kazuko Matsumoto.	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Wiley Blackwell.	5. 総ページ数 3120
3. 書名 The history of English in Micronesia. In K. Bolton (ed.) The Wiley Blackwell Encyclopedia of World Englishes.	

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Oxford University Press.	5. 総ページ数 304
3. 書名 Japanese in the world: The diaspora communities. In John Maher (ed.) Language Communities in Japan. 15-30.	

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 London: Routledge.	5. 総ページ数 538
3. 書名 The contact varieties of Japan and the North-West Pacific. In Umberto Ansaldo and Miriam Meyerhoff (eds.), Routledge Handbook of Pidgin and Creole Languages. 106-131.	

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Peter Lang.	5. 総ページ数 296
3. 書名 Nativisation in adolescent Palauan English: A discourse-pragmatic perspective. In Y. Asahi (ed.), Proceedings of Methods XVI: Papers from the Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology, 2017. (Bamberg Studies in English Linguistics 59). 75-82.	

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko and David Britain.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan.	5. 総ページ数 233
3. 書名 Pancakes stuffed with sweet bean paste: Food-related lexical borrowings as indicators of the intensity of language contact in the Pacific. In G. Balirano and S. Guzzo (eds) Food Across Cultures: Linguistic Insights in Transcultural Tastes. 127-167.	

1. 著者名 Matsumoto, Kazuko.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge.	5. 総ページ数 488
3. 書名 Language variation and change. In P. Heinrich and Y. Ohara (eds.) Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics. 199-217.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ブリテン デイビット  (Britain David)	ベルン大学・Department of English・Professor	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	モレイ オリムピア  (Morei Olympia)	ベラウ国立博物館・Museum・Director	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ワトソン ケビン  (Watson Kevin)	カンタベリー大学・Department of Linguistics・Executive Dean	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
パラオ	ベラウ国立博物館			
ニュージーランド	カンタベリー大学			
スイス	ベルン大学			